

中世歌学書に見える言語意識の性格

佐田, 智明
九州大学大学院学生

<https://doi.org/10.15017/12354>

出版情報 : 語文研究. 6/7, pp.29-39, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

中世歌学書に見える言語意識の性格

佐田智明

一
八雲御抄によると、次の如き説が述べられてゐる。

一、同事の詞かはりたるは、尤可^レ為^レ病。良牟与^ニ礼牟一京極御息所歌合勝。介礼与^ニ介留一微子女御歌合中務持。良志与^ニ奈利一寛和歌合惟成持。或不^レ病ども是等は病なり。准^レ之多。(久曾神昇氏「校本八雲御抄とその研究」所収本三十一頁)

右の例中の「同事の詞かはりたる」は同義異音の場合をさすものであるが、公任の「ことばことなれども心おなじきを猶去べし」(古典文庫、公任歌論集所収新撰髓脳)や、奥義抄に(巻一、十八、避^レ病)

古式之趣如^レ此但近代用る所の歌は卅一字同心の病はかり也、同心の病とは一歌の中にふたゝひ同事を用る也(正)
などと誌されている事をもつてその間の事情が知られる

今、堀部正二氏の「纂輯類徒歌合とその研究」を参照して問題の歌を求めれば、「れむ・らむ」は、

ちはやぶるかみもしる覧かすがの、わかむらさきにたれかてふれむ。(延嘉廿一年京極御息所歌合)

の如き歌であつたらしく、「らし、なり」は、

鶯のなくねのどかに聞ゆなり。花のねぐらもうごかさるらし。(寛和二年、寛和歌合)

である。こゝで吾々は両例の語が各々同義語と見做されたと決める前に、中世歌人の言語把握の態度及び文語把握の状況を考え、もし可能であれば、中世人言語意識の型を知ることがかりを得たく思うのである。

二

そこでまず歌合の例をもつて考えてみる。方法として次の如く展開する。即ち、永縁奈良房歌合(大治二年)に、

秋の月明石の浦はなびきもにすむわれからの数も見つべし

の歌の判に、俊頼が

これも心えず。数も見えけりとこそいふべけれ。見つべしとは只今までは見えぬにや。いつ見るべきにか。おぼつかなし。(新校羣書類従八・五五五頁以下羣八⁵⁵⁵と略記、以下同)

といている。見えけりと改める事自体に語法上の問題はないが、見つべしを「只今までは見えぬにや」という時つべしの把握のしかたが知られ、逆に見えけりを只今までに見たと考えるとすれば語法意識の問題となるのである。

右の方法によって判詞から所謂テニヲハに相当する部分を集めて、当代の文語法体系をうかがう事も不可能ではないと思う。

① 目にみが風にきたなびく花よりも光や増る朱の玉がき：光やといふやの字や見ずして思ひやれる心地すらむ

(別雷社歌合、後成判、羣八⁷⁰¹)

② こゝろあれやかきなくらしそはつ時雨まださしはてす柴のかり庵。：こゝろあれやおけるやの字こそふるくおきならはしたる心にはあらず待るめれ。これは時雨をかりていはむこゝろなるべし(住吉社歌合、後成判、羣

八⁶³⁹)

③ 山風や霞ふきながせ吉野川しらゆふ花の色ぞくもれる

：初五「文字」やの字たがひてきこゆ。やの字をつかふことばは大原やをしほの山、春やとき花や遅きと此二つの詞に用ひ侍る、吹き流せといはむ上の句にはや「の」字如何。所謂不知歌趣一歎(石清水若宮歌合定家判、羣九²⁷⁴)

④ 君がりと浮ぬる心迷ふらん雲はいく重ぞ空の通路、：

右申云、浮きぬる心やとこそいはまほしけれ、(俊成)判云、左の浮きぬる心は迷ふらしなどいふべかりけるを、此歌にあはず聞ゆべきが故に、迷ふらんといへる、心やといはずともかくてありぬへし(六百番歌合、岩波³⁰⁵)

⑤ わたつ海の波のあなたに人はすむ心あらなん風の通路(右方申云)下句にの文字も多かり海原やとはなどなかりけるにか。(判云)：又一「海原」海原やたゞ同事なり、誤りて此の歌はのにてあるべしと見えたり(六百番歌合、岩波³²³)

右はやについての例であり、いずれも後世信奉された俊成定家判の歌合中のものである。例③の「や」の二用法は手刃波大概抄の「屋字十品」に程遠いが、両家の判詞中には、やに関する種々の場合があげられており、「思ひやる」「時雨をかる」「らんにつゞけるや」「ののや」等、てには秘伝に関するものである事は想像に難くない。(註二)

や。に関連した語にかがある。判詞には見出し得なかつたけれども、

シカモカクスカハ然モ隱也。古語也。此カトイフ字ハ物ヲ其歎ナドトフニハアラズ哉トイフ詞ヨイヒサシタル也。古語ノ躰也。(顯昭、古今集註、続々群十五16)

によると、かは「問フカ」であり、哉をもつて咏歎を代表している。

次に「らし」「らん」について考察する。前述の例④に「此歌にあはず」云々とあるが、これは、「らし」が古語であり、古風の躰の歌にふさわしい語である事をさすものであろう。「らし」を古語とする事公任以来であつて、俊成判の六百番歌合にも、

紅に関の小川はなりにけり音羽の山に紅葉散るらし。：(判)音羽の山関の小川らしに不及にや。彼のみむるの山に紅葉散るらしなどいふに似ざるべし(岩波174、175)と云い、俊成らが歌の躰と用語との不調和を嫌つたのは、上下句のかけあはぬのを嫌つたのと同様である。

萩が枝をしがらむ鹿も荒かりし風のねたさに猶しかずけり

顯昭

左歌猶しかずけりなどいへる古風の躰にやと見ゆるを、上句より風のねたさまでは近き歌の体なるこそ布衣の人の著靴したらん心地し待るめれ(六百番歌合岩波132)

右は一例にすぎない。さて、例④の場合らしをらむに変わったのは歌躰によるとしても、その場合のらしは推定であつて、らむをらしに近いと俊成は考えたのであろう。しかし、方人は、らむを見て疑問と見、や字なくてはと難じた。即ち、らむが疑問としてやと呼応させる表現法が存した一方、らしがらむに置換されて死語化する過程を知らしめる。や、以前の例と見られる拾遺抄注(顯昭)所引の例、「ラムト云フ詞ハマサシクアル事ニモヨムナリ」(羣十三207)において、現在推量のらむの意義がうすれていた事が考えられるから、右の事実はかなりの必然性をもつと見られる。

次に、「し」「ぬる」「つる」(すべて助動詞連体形)等について見る。

(一) 知らざりしわが恋草や茂るらん昨日はかゝる袖の露かは(左歌)

今朝までもかゝる思ひはなきものをあはれあやしき袖の上かな(右歌)

右方申云左歌かゝりしとこそいはまほしけれ。左方申云、右歌今朝までかゝりつるとこそいはまほしけれ。

判云、左歌かゝるの難可然か。右歌かゝりつるとはいふべからずや。かゝる思ひは無かりつるものとぞあるべき。(六百番歌合、岩波133)

(二) 命かは逢ふに心やかへつらん惜しからぬ身ぞ惜しくなり行く……惜しからぬ身ぞ惜しくなり行くといへるこそぬる。とは侍らぬにか。行くにては一夜の事とも覚え侍らず
(同 岩波 243)

(三) たえだえにしぐれし山の雲なれどそれも残さぬ四方の紅葉ば……家隆卿云(中略)しぐれし山のといへる紅葉のさかりにこそは時雨もことに侍らぬ。今は時雨せぬやうにや聞え侍らむ。しぐる(る)と侍るべきにや
(「蓮性陳状」所引羣十 443)

(四) 桜ばなちり初めしまでみし程になぬかになりぬしがの山越え……左はみる程にとやいふべからむ。しの字にては少し事たがへるにや(俊成判民部卿歌合羣九 19)あかなくに我がしめし野の女郎花こゝろ許さぬ人を見るな……我がしめし野のとあるこそこゝろえね。花見てこそあかなくとも思はぬ、何を見てかはしめ「け」む。しめつるとあらばこそ心になはぬ、言葉「と」心とちがひてなむ覚ゆる。

(五) (顯季判、六条宰相家歌合、羣八 21)秋ふかみよ風はげしむべしこそよむの里人衣うつなれ……むへしこそと誑る、おもふべし。さすがによむやうある詞也。此歌にはかなはずやあらむ、せめては衣うちけれとやよむべからんとぞみえはべる。今まにあ

たりて風もはげし、衣をも打をきよてよむならばよ風も寒く吹なへにころも打也などよまれ侍るべき。

(東塔東谷歌合、永長二年羣八 2)

例(一)には「し」「つる」の区別が示されていると思われ。今朝までに対しつると置くのに対して、昨日に對ししとおいたものである。「し」が過去の事実をさして現在に關しない例は(三)にも見られる。しかし(四)の顯季の判詞は「し」では花を見ない事になり、「つる」とあるによって經驗を示す。例(二)はぬると行くの区別である。「ぬる」は「一夜の事」とある事から完了の意にとるのが穩やかである。

又、例内では「きよてよむ」意がない故をもって「けれ」に正している。ちなみに、「きよてよむ」を「なり」で示すのも王朝期の文語を伝えていると見られよう。

以上は俊成、定家の判詞を中心とし、他の歌人の判詞の例を加えてニハに相当する部分について言う所を挙げ、それらの語中に見える言語把握の概況を調査したのであるが、とりまとめて次の事が考えられる。

① 少くとも中世初期歌人にあつては文語把握が多少の時代の反映があつても、かなり深い所まで觀察しているのであり、大体において、正しい用法を指適している

みられる事。

② 字、という名のもとにテニハが正しく語としてとりあげられておること。

三

次に註釈の類を考えてみる。注釈における対言語態度をこの期に求める時、最も適当な書は、やはり俊成庭訓による定家の僻案抄であろうか。

(用語) (訳)

1. ひちて——ひたして 此の詞むかしの人 このみよみ

けるにや (羣十三 179)

2. 見らむ——見らむとは見るらむといふ同じ心也。みる

らむといはば文字多かれば見らむとよめり、

ことにしたがひて此のごろもなかよきざら

む (同 179)

3. あやなし——あやなしとはたとへばかひなき事をあぢ

きなくなどいふやうなる詞なり (中略) ふる

き歌を多く見て言葉つかへるやうは心うべし

(同 180)

4. たれしかも——誰か、誰かも、誰しかも。文字少な

れば加ふ (中略) 古き歌にはかくいたづらな

る文字をそふるなり (同 180)

5. あやめ——昔の人中頃まではつねにかやうにいふ詞な

どは、みなあまねくしりたるを近き世より

かくやすき事をもならはであたらしく万のこ

とをつくり出すなり (同 184)

6. せめきけむ——せめく (毛詩)。此の詞つねに人のい

ひならへる事ならねば責来 (けむ) にてあり

なむ (同 187)

右の例から、①上の語 (何れも古今集) が古語化している例であることは明らかである。②これらの古語が歌体によつては今後も使用されるべきものである。公任も「かも、らしなどはつねによむまじ」といったが常にはの意である。(先の俊成の「らし」この例2参照) ③これらの

語の熟達は時に古歌の例を多く見ることによつて得られ、④古語の把握が常用語によつて最も簡単に置換される事を知る。従つて当時代にはない語は類似語をもつて代用し、その間隙は休め字、相通、広略、助ケ詞で説明される (例4) ⑤僻案抄の註釈を教長註の古今集や顯註のそれと比較すると、

してしがな↓せばや (僻案抄) (181) ミテシガナ↓ミバヤ (顯

註) (104) テシガ↓バヤ (教長註) (31 76)

有なめど↓あらむずらめど (僻案抄) (1) ↓アラムズラ

メド (顯註) (16) ↓アランズラメドモ (教長註) (28)

の如く、異説のない場合テニハに關する部分の訳が一致するの、相互の影響關係以上に常用語で訳したという点が考えられるのであろう。という事は註釈によつて常用語の状態がある程度まで知られる事を考えさせる。^(註)

しかし、同じ歌学書中の註釈においても、清輔の初学抄にある由緒詞の例は、一語一義であり、個々の歌の註釈とちがつて総括的な訳語を必要とするから、かつて時枝誠記博士がふれられたように古語を漢字の表意性に頼つて訳する例が多く、従つてテニハの類は無視されがちとなる故に語法的な正確さも失われてしまう。この傾向は一般の歌書にもあるのであつて、両者の差は程度の問題に過ぎない。故に相通などによつて割り出された二つの語が同じであつて同じでないという場合があらわれる。

一例として「||み」をあげることとする。中世にわたる例は次の如くである。

綺語抄(仲実) 人詞部 べみ べしといふ事なり(統羣十七 98)

和歌初学抄(清輔) 由緒詞 べら 可之 べみ 同 (歌学大系二 221)

袖中抄(顯昭) 卷十三 べみ べしといふ詞(歌学文庫卷 170)

和歌色葉(上覚) 上、通用名言 山たかみ 谷ふかみ、此

みはしといふ詞也。みとしとは同じひゞき也。

(歌学大系三 157)

八雲御抄(順徳院) 言語部世俗言 べら 可 べみ 同 (久曾神氏校本 155)

後撰集正義 べみとはべしといふ詞也(統羣十六 624)

古今集註毘沙門堂本タカミトハタカシト云也、シトミト

同ヒ、キノ字也(未刊古文古註釈大系四 48) cf

ヌキウスミ ↓ ヌキウスクシテ(同 34)

和歌大綱 たとへば谷ふかきとあらんに こはく聞えば

たにふかみとたすくべし、指合ふ事あらば谷ふかきともあるべし、(歌学大系四 140)

烏丸本悦目抄 谷ふかきとあらんはこはくも聞えとなり

もさしあふべくは谷ふかみとかゆへしみるときと

は同じひゞき也(十八ウ、国語学大系十四卷)

片端(專順) 寒く、寒き、遠くとをきといへばいづれ

も心にあはぬ時みとは置くべきなり(岩波文庫連歌論集上 27)

春樹顯秘抄十八、たすけ字の事、谷ふかきといへは能も

きこえ侍らねば谷ふかみとかゆる也。きとみは

同じひゞき也(国語学大系十四卷)

前半期においてべみがべしと置かれているのをべみ||べしとすることは危険である事、後半においてふかみ対ふか

しとの關係に似ている。即ち、「能きこえぬ」「心にあはぬ」「こはく」「指合ふ」の用語は一見歌体に關係した表現面の上での発言である如く思われるが、問題はさほど簡単ではないのである。

成立年代未詳の愚秘抄(鎌倉末から室町中期の間の成立)には、

又撰者の歌を入るゝ事書には、いづれの時よみ待りしと書べし、しの字かならずおくべし、さらぬ人の歌の事書にはよみ待りけるなどかくべし、是一ふしある故実なり、若人にしられぬ私集などを撰み置て侍らむをば、後に人のみて此集の撰者は、此作者にてありけると

みらるゝも此しの字のかはりめなるべし(羣十三⁵⁸)

という一節があり、「し」「ける」の用法上の区別が見られる。詞書の終りに、右例の如く「し」を用いるのは勅撰集には稀であり、撰者の作にても「ける」「る」「待る」で結ぶのが普通であったのを、本書の記述者は、体験的と非体験的とに分つて、敬て故実と云つた。この二分は「き」「けり」のある面をとらえていると思われる。このような説が意識的に表われてくるのは、それを要請すべき言語的背景が必ずや存したものである。この「し」は「過去のし」に「ける」は「治定」更には「現在の詞」として扱われる。しかして室町期において共に口語から遠ざかったであろう事は先学の説く所である。「し」「ける」の説は

又相通と本韻に関する説にも共通点を有している。

時枝誠記博士の国語学史(六〇頁)によると、「むばたま」「ぬばたま」に関して、歌学上重視された問題があり、これについて博士は彼らが「むぬの別を髪と夜との二の語の意味に聯関させて考へた」旨述べられ、「これは語とそれの記載の間には意味的な聯繋があるといふ考方によるのである」とされた。

類似の場合として、袋草子所引の後拾遺問答に

経信 いきかへり(蘇生) ゆきかへり(往還)

通俊 いきかへり(往還) (歌学大系二 196)

と云うのも挙げられよう。

さて、又バタマに関して想起されるのは仙覚抄で、時枝博士の御研究がある。仙覚はウ・ヌ・ムを相通としながら「ウ」を本源的な形とした。悉曇学の応用である事は周知の事実で、先験的言語の意識はとにかく、音義的な語の分解・註釈・理解に見られる如く、音形式を異にする同義語類義語は、何らかの方法で区別しようとする意識も存したと思われる。従つて、同じ事と註されるのにも種々の場合があり、八雲御抄のらし・なりは意識的には同じとされて、語法体系にては差があつたものゝ如く、一方ウバタマの例はその逆で、往(いき・ゆき)も同様と見られる。即ち語法意識と語法体系とは、れがあると思ななければならない。

四

前述の如く語法に關する記述が、把握された語法体系と必ずしも一致しないとすれば、当然文語修得の方法が問題になる。

手爾葉大概抄に

学フ者ハ先達ノ秀歌ヲ以テ敢テ自得スルニ勝ヘズ

併シテ達人之ヲ善クスルハ鬼神モ之ニ感ジ葉涙之ニ出ス

或は宗砌・砌塵抄に

大かたてにをはの事は調子にたとへ待なり。人のをしへによるべからず、我と吟じ合て可然事也。但ならひ

て知るてにをほも候也（岩波文庫・連歌論集上 283）

。にはの内容は時代・論者によつて異なるが、右例はてには修得の困難性をいい、てにはは体得すべきもので伝受を要するという。更にてにはの修得的内容も加つて、完全にてにはを修得した人がよく歌えば鬼神も感じさせるとする。前述判詞例(4)不知^レ歌趣^一歟も同じ考えに出るものと思う。

具体的な例を挙げてみると、こそその結びの問題が興味深い。先ず大概抄に

古曾者兄計世夫禰之通音志志加之手爾葉^{ニテ}尤之詞受^レ下^ニ

留之。

とあり、宗祇の抄之抄には、

一、ししかのてにはとは、こそうれし、こそありし、こそ思初しか我こそ下に思ひしか^①ウ

と註している。古例に徴すると、

古今¹⁸⁷ あきこそかなし（清輔本・崇徳院御本）（顯

註古今集、卷十三、続々羣¹⁰⁰にもその由見ゆ）

があり、「し」を回想の「し」とすれば

後撰⁴⁵⁵ もみぢばはをしき錦とみしかども時雨と共に

ふりてこそし、（浄弁本、関戸本は「ふりて、そ

こし」）

拾遺⁵⁷² 木たかきかげとあふかれむものところそみし

（長歌）

（詞の玉緒、卷五参照）

などあつて、かなり古い時代から変格の例をもっている。

このように宗祇が抄を書いた頃、一条兼良が

限りなきよはひありとも君をこそ知る人にせむ庭のた

ま松

について、

知る人にせめとあるべきにや（羣丸⁶⁷⁵）（文明九年七月

七日歌合）

といったがこれは秘伝にいう「第四の留り」に關する。彼

以前に「こそ」の係結について変格の例などは見えても判を加えた例は管見に入らず、むしろ、問題にされなかつた（のみならず判詞自体に誤用がある）と思われるが、こゝに取上げられたのは、兼良の修得した文語体系に反するものとして考えたのであろうか。従つて手爾葉秘伝の類が意識的に文語に作用する事になるのであろう。しかし、同時に秘伝の類が古来の歌例、及び定家などを中心とする判詞・註釈の類を資料にする事から、秘伝が誤用の可能性の上に立つ点において、国語史上の語法変遷をふまえていると考えられる。誤用とはいつても、和歌実作上の修辭的な内容が秘伝中に含まれていることは勿論であるが、こゝに想起されるのは、秘伝の記述と實際に体得された文語との間にもずれがあり、双方が互に影響しあっていたのではないかという事である。次の例、

イ 山ふかみさしもいそぎし夕ぐれをこの頃しらぬ花のかげかな (判云) 夕ぐれをいそぐ心も、何故とおもひがたし云々 (一条兼良判、按察使親長卿家歌台、文明五年) (羣九 649)

ロ ふかく我が心にそめしもみち葉を時雨のみとは何おもひけむ 右方申云：染めしの過去の誦聊思ひた「きなり」、(判云) そめしの過去の詞、誠に左の

難におち侍るべし、又露霜などはしぐれにあいそふ事は侍るべし、心の染まるばかりにて、紅葉の色のまざるべきもいかゞ、 (羣 691) (文明十年)

八月二日歌台、兼良判)

「山ふかみ」が理由を表わすと見れば兼良の難はあたらな。作者がどういう意識でもって詠んだか不明ながらも、前述の如く、深み↓深し(き)では解せられぬ所に奇妙な問題を惹起したものはなからうか。

ロ、例のようにしを過去という事姉ヶ小路系秘伝に見える例が古いであろう。応安新式に例が(羣十三 717)あるが、古今秘註抄(鎌倉末までの成立、未刊国文古註秋大系四所収)にもそれらしいものがあるから更に遡るものかもしれない。これはしが形容詞語尾し・べし。のしなど、區別する必要から生じたもので、仏説の過現来を受けたものである。ところで、過去とおくと回想のしは一律に過去となり、必ずしも合致しないもの含むようになる。俊成らの判詞、愚秘抄のし等個人差がないとは云えぬが、他の語と比較して説く時おおむね正当な見解に達している。ともあれしが中世人の目から見て過去らしきものに移行しつつあったと考えてもよいであろう。それはちやうどぬ。(完了)が(註六) 辿った道と似ている。

資料が少ないのでやゝ独断に傾くかもしれないが、秘伝の類と文語（こゝでは歌の場合のみを考えた）とは意識的と無意識的との相互関係にあり、その様態は中世初期の語法意識と語法体系との間のずれにもとづくものと思われる。然してそのずれは「トラホー目」式の対言語態度に依るものと考えられる。

註一 こゝで同義というのは後述するように問題である。詞の病の問題は先学の説く所であるし関係がないと思うので省略した。

同義別音の例でも公任から奥義抄の間にも和歌童蒙抄、俊頼口伝など説く所がある。

註二 「や」の用法を問われたら、定家は⑧の如く答えたかもしれない。又、やとらん意識的な結びつきの徴候があり、その場合の疑問は軽かつたものゝようである。なお引用は紙面の都合上関係の部分のみを抄記した。

註三 参考例をあげておく、俊頼口伝に云、あやめもしらぬと云ことばつねも人のいひならはしたることばなり、よしあしもしらぬといふことばなれば云々（続々羣十二²³⁶）

僻案抄云、よるべなみよるべとはたとへば立ちよりのむ縁など有るあたりを云ふなり、無縁にさしは「な」れたるをよるべと（は）いふなり、此事たよるべといふ詞にて歌に

もよみ詞にもかけば昔の人はずたがふこともなくいひ伝へたるを、ちかき世に、ものゝよしをしらず、古き事を見さとらぬもの、源氏物語に、賀茂祭よるべの水とよみたるは、社頭に神水とて瓶に入れたる水なりなど、（思）自由にいひ出でたるはいふかひなき事なり、おなじ物語のかたはらの巻々をだに見ざりけるいふかひなき事なり（羣十三¹⁸⁵）

註四

対訳例に乏しいから容易に結論はだせない。教長註から古典全集本によつて例をひろうと、たとえば、助詞なむは大体次のようになる（数字は頁数）

イマモナカナン↓ウチハエテナケ 32

イタクフラナン↓イタクフレ 47

ツギテフラナン↓ツギテフレ 40

マドハナン↓フミタガヘテキタラムヲ 82 （完全な対訳ではない）

ナリナナム↓ナリネ 91

いわば下知（命令）のなんである。又、比較する時異説がある所は問題にならぬ。たとえば今シハ↓今シバン、（顕昭）今しは↓今は（定家）など。教長註古今集に関して吉沢義則博士は次のように述べておいでになる。（「国語国文の研究」所収「藤原教長著古今集註」一〇八頁）「然し、（教長註は）当時如何なる言葉が無くなつてゐたか、意義が如何に変化してゐたかを知るのには無上の材料である。王朝の物語類から生死語を識別するのは容易の業ではない。殊に今日の如く證本の得られ

ぬ時代では益々困難な事である。で、此の方面の研究には歌学書と註釈書とが最も都合のよい材料である」こゝに併せ記して賛意と敬意とを表する。

註五 愚秘抄については新版羣書類従十三巻解題（福井久蔵博士）。

佐々木信綱博士日本歌学大系四巻解題を参照。

註六 古典註釈に現はれた語学的方法（日本文化叢考所収）

註七 「座句ノテニハニテ連続タル、留メ」をさす。大概抄はすべて書下しにした。

註八 顕昭、拾遺抄註に「アリニシ物ヲトハアリシモノト云フ詞ニ二文字ヲクハハタルナリ」（羣十三註）とある事は、やはり

「に」が死語化する傾向をもちはじめた例と思われる。当代に正しい用法は勿論あるが、歌においても「つ」との混用がみられる事教長註の訳例にも、その傾向がみられる事から「に」の死語化の傾向を推せられる。この「ぬ」は歌論にをはんぬとして扱われ、不のぬと区別せられた。

後記、本稿成るにあたり、終始御指導下さった福田良輔先生、数々の御教示をいただいた春日和男先生に厚く感謝申し上げます。また本学の鶴久、森山隆両先輩の御厚意を感謝申し上げます。

執筆者 紹介

福田良輔	本学教授
大内初夫	鹿児島大学講師
白石悌三	本学大学院学生
遠藤康子	純心女子学園教諭
佐田智明	本学大学院学生
森山隆	本学助手
立川昭二郎	広島修道短大助教授
大原一輝	香川県主基高校教諭
井手恒雄	福岡女子大教授
瀬良益夫	金光学園高等学校教諭
瀬古 確	熊本大学教授
今井源衛	本学助教授